

壁の向こう側へ

城南中学校 三年 藤崎 将汰

僕は小学校二年生の終わりから地域のミニバスケットボールクラブに入り、バスケットボールを始めた。

始めた理由は、友達に誘われた事もあったが一番は痩せるためだった。当時の僕は、周りに比べてかなり太っていたのだ。運動は嫌いではなかったが、だからと言って身体能力が高い訳でも身長が高い訳でもなかった。そんな僕が、本格的にバスケットを始めることになったのである。クラブに入る前から体験生として、体育館の端で練習を見学させてもらっていたが、実際に先輩や同級生をプレーヤーとして見ると、よりカッコよく見えたことを覚えている。一週間程練習すると、自分も多少ボールを扱えるようになったが、とてもパスをもらえないレベルではなかった。そして、初めて試合形式の五対五の練習に入れる日がきた。相手は、学校では大人しい性格の同級生だった。試合が始まった途端、僕の目の前にボールが落ちた。僕がそのボールを取ろうとした瞬間、相手の同級生にカットされてしまい、そのまま簡単にシュートを決められてしまったのだ。その後も全く歯が立たなかった。もちろん、僕はバスケットを始め一ヶ月も経っていないので、勝てる訳がない。だが僕はその時、人生で初めて悔しくて泣いてしまった。その日から僕のバスケットをやる理由が「痩せるため」から「先輩や同級生に勝つため」に変わっていたのだ。

悔し泣きをした次の日から、早速朝と夕方以外で自主練習を始めた。朝は近所を一時間走ってから学校に行くようにした。クラブの練習の後は、帰ってきてからひたすらドリブルの練習をした。クラブの練習は、四年生になるまではコートでの自主練習が多かった。その間、同級生の多くは友達と話しながらシュートを打っていた。正直、僕もその中に入りたかったが、先輩に勝って試合に出たいという一心で、コートの中でプレーしている先輩を見ながら、一人でドリブルの練習を重ねた。

四年生になるとシュートもだいぶ上手になり、ドリブルも認めてもらい、四・五年生で唯一スタメンに選ばれた。六年生の何人かを抜いての抜擢だった。ただ、実際の試合ではただボールを中央までドリブルで運んでくる役割で、あまり楽しくなかった。もっと活躍したいと思った僕はシュート練習をする事にした。シュートフォームもワンハンドに変え、自宅のゴールで毎日千本以上打ち続けた。

そして五年生になった。やっとシュートにも行けるようになり、チームの主軸として戦えるようになった。大会での活躍を認めてもらい、五年生ながら選抜選手に選ばれたのだ。選抜はずっと目標にしていたため、とても嬉しかった。そして、気づけば小さい頃に太っていたとは思えない程痩せ、ガッチリした身体になっていた。

六年生になると、センターという大切なポジションを任された。「やっと自分の代だ。頑張ろう。」と思っていた矢先、新型コロナウイルス感染症の拡大により、半分の大会が中止にな

ってしまった。今までの努力はなんだったんだろう。僕はやりきれない気持ちのまま、小学校を卒業した。中学校に入学しても、思うようにバスケができない日々が続いた。

あつという間に中学三年生になり、やっと制限なくバスケができるようになった。だが大会では、思うように結果が出せず、総体も六位に終わってしまった。

僕がこの経験から伝えたい事は、簡単に諦めない事だ。太っているから無理だと僕もよく言われた。でも、努力すればどうとでもできる。僕は大会で良い結果は残せなかったけど、今でも選抜に入っている。努力がムダではなかった証拠だと思う。

努力で越えられない壁はない。僕はそう信じ、これからも日々挑み続ける。